

した。

「もたもたやっている、薬が切れるぞ……」

効き目は服薬量次第だ。一応、背格好から量を判断したが、初回だとまだどの程度効くかわからない。鷹羽は悠々と片手で由岐を抱き、頤を摘まんで上向させた。

「早めに快楽を仕込んでしまえ。そうすれば、薬の効きなど甘くとも、自ずと落ちていくだろうよ」

「……は……」

引き結ばれた赤い唇を、肉厚な唇で割り込む。力なく従って開かれる歯列をさらにこじ開け、鷹羽はなまめかしく熱い口腔へ舌を差し入れた。

「……う……」

反応はある。弱いながらも口は鷹羽の舌を押しつけようとしてゆるく首を振っている。だがその時はもう鷹羽のほうが惹き込まれていた。

「……やばいな……」

形のよい小さな頭を動かぬようにしつかり手で抱え込んで、嫌がる由岐の口腔を、さらに舌で蹴る。その熱さも、切れ切りに吐かれる息も煽情的で、鷹羽は危うく理性を失いかけた。

接吻だけでこんなにもついでいかれた相手は初めてだった。

「ぐ……う……、……っ……」

もつともつと奥まで搔き回したい。夢うつつにされながら、抗う由岐をもつと犯したい……。由岐の零す息に、腹の奥が炙られたように熱くなる。鷹羽は由岐が膝立ちになるぐらゐまで、脇から抱え上げ、あられもなくさらされた薄い胸を掌で掴んだ。ふくらみも何もない場所を、骨太の指で揉みしだく。指の間

からは桜色の胸粒が垣間見え、鷹羽はことさら強調するように捏ね寄せ、由岐の背を逸らせて、高見の見物を決め込んでいる秀晴に見せつけた。

「……坊ちゃんめ、興奮している癖に気取るんじゃねえ。」

一応、香野家の人間だからだろう、事前の打ち合わせでは立ち合いはするが……と洩る風情をみせていたが、由岐の裸体に目を奪われているのは明らかだった。

義務だからと、淡々と支度を手伝っていた右近も、由岐が愛撫に身をしならせる度に、気難しそうな眉間の皺を深くして、理性を保とうとしている。鷹羽はそれが妙に可笑しくて、彼らを煽るように由岐を蹂躪した。

馬鹿な奴らだと思ふ。二人ともとつくに由岐の身体に嵌っているというのに、プライドが邪魔をして貪れない。

「……ならば俺が頂戴する。」

「……う……あ……は……っ……」

懸命に閉じようとする唇を、顔を傾けてより深く喰み、舌を捉えて強く吸い上げる。くぐもつた由岐の声に艶が滲むのを確認して、鷹羽は胸を揉みしだく手に緩急をつけた。

掌で粒ごと撫で上げ、指全体で強く揉んでから、その先端の粒を指で摘まむ。由岐の細い腰がビクリと揺れるのを見ながら、乳首を潰すように刺激し、捏ね、ぶつくりと赤らむまで虐める。

自力で立てていない由岐を、半ば背後から抱き起こすように抱え、足元側にいる家老たちと秀晴に、その艶やかな媚態を見せつけた。

「……いいのか、秀晴。加わらぬなら、俺一人で味わうぞ。唇を離してからも、形のよい顎をもう片方の手で抱え、食